

# 高松宮宣仁親王論

——皇族としての終戦工作の行動原理——

濱田英毅

## 一、総説——皇族の本質

これまで皇族は政治の世界と無縁であると考えられてきたが、その皇族が終戦工作をしているのはなぜであろうか。その点に関して、従来あまり検討されてこなかった様に思われる。政治的発言を慎んできたはずの皇族が政治問題に踏み込むには、何か相当のきっかけと決意があったはずである。本論文は、なぜ皇族が政治に主体的に係わるようになったのか、その理由を、高松宮の皇族としての自覚の変化を見ることができるとするものである。本論に入る前に、皇族を論じることの意味をまず明らかにしておきたい。また、皇族の中でも特に高松宮を取り上げる必要性についても説明する。

天皇に関する論文は非常に多く、近年ではいわゆる宮中グループの研究も進みつつある。それにも係わらず、天皇・宮中グループのどちらにも関連しているはずの皇族の研究は、それほど進展していないのが現状である。なぜ皇族は研究対象として注目されてこなか

ったのか。おそらく次の様な事情によるのだろう。第一に、「宮中のことは一切外部に発表しない不文律があった」<sup>(2)</sup>ために、史料の制約が大きかったからである。第二に、皇族はお飾り的な存在で、政治との関連性は薄いと考えられていたからである。第三に、皇族による終戦工作は成功か失敗かはっきりしないこと、<sup>(3)</sup>終戦時の東久邇宮内閣も短命に終わったことから、皇族研究の意味自体が薄いと考えられていたからである。しかし第一の問題は、昭和天皇崩御の頃から宮中グループ関係者の史料が続々刊行され、特に『高松宮日記』<sup>(4)</sup>が刊行されたことで相当改善された。第二の問題は、田中宏巳氏・野村実氏・柴田伸一氏・後藤致人氏などの諸研究によって、皇族の動向が政局と決して無縁でなかったことが事例研究を通じて明らかにされつつある。第三の問題は、行動の結果の評価も重要であるが、それ以前の問題として最初に指摘した様に、お飾り的な（と思われていた）皇族が政治行動に主体的に取り組んでいった理由が十分に明らかにされていない。なぜそれが皇族でなければならな

ったのか、そしてなぜ皇族が行動を起こすに至ったのか。皇族の擁立を図った人々にとっては、有能だからという以上に皇族だからという理由の方が重要であった。したがって、この点を考えてこそ、皇族研究の意味があるものと思われる。ここで皇族の存在意義なり行動原理を一度明らかにしておくことは、今後の皇族研究の土台ともなるであろう。

いうまでもなく、皇族の本質は天皇との関係にある。高久嶺之助氏は、皇族の存在意義を次の二点にまとめている。<sup>(7)</sup>それは「第一に、皇族は皇位継承権者の集団として、すなわち天皇の空位を防止する集団として存在」しており、「第二に、社会的に天皇の權威を維持および推進する集団として存在」しているということである。天皇と皇族はこの様に一体不離の關係であつたために、「皇室の一員たる皇族をして実行せしめられ、万一予期の結果を得られざるときは皇室は國民の怨府となるの虞」<sup>(9)</sup>が考えられた。その危険を回避するために、皇族には何らかの行動規範が必要とされたのである。

明治憲法によって天皇は「政治への関与を抑制する立憲君主」<sup>(10)</sup>であることが求められており、昭和天皇も努めて「立憲政治下に於る立憲君主として」<sup>(11)</sup>行動しようとしたことは確かである。<sup>(12)</sup>この様に天皇が「立憲君主」の立場を取る以上、皇族も同様の立場を守ることが求められたのである。ここから、皇族は政治に関与せず発言・行動も控えるという「皇族の不文律」とも呼べる原則が確立していったものと思われる。その風潮が昂じて「陸軍の者や宮内省の者や又は其他各方面の者……夫等の大部は皇族などは唯飾り者と考へるもの」<sup>(13)</sup>も中には出てきたという。

では、こうした状況であったにも係わらず、なぜ皇族を擁立する動きがあったのか。真崎甚三郎・沢田茂・近衛文麿は、それぞれ主張している。

真崎甚三郎（参謀次長・陸軍中将）——昭和七年

昭和七年十二月、私（註、東久邇宮稔彦王）は名古屋の師団長から、急に、参謀本部付に転任した。参謀次長は真崎甚三郎大將（註、當時は中将）であり小畑（敏四郎少将）は参謀本部第三部長で、いわゆる皇道派全盛時代であった。小畑はよく私の室に来て、満州事変のいきさつを話したり、私を正式の部長会議に列席させた。

おかしいと思っていたところ、ある日真崎が私の室に来て、「閑院宮参謀総長も、参謀本部員の秩父宮も、満州事変についての軍の意図を天皇陛下に遠慮して、十分に申し上げてくれぬから、あなたから直接陛下に申し上げてくれ」といった。

私はこれを聞いて、まったく驚き、またけしからんと思い、「参謀本部の真意を、天皇陛下に申し上げるのは参謀総長、あるいは次長の任務である。単なる参謀本部付の私が申し上げるのは筋違いもはなはだしい。私はそんなことは絶対にしないからお断りする。そんなことなら、私を一日も早くよそへ転任させてもらいたい」と、突っぱねてしまった。

沢田茂（参謀次長・陸軍中将）——昭和十四年

私が次長になったときは、秩父宮（雍仁親王）殿下は、すで

に大本宮幕僚としてご勤務中であつた。私はその意義について考えてみた。殿下の大本宮ご在職は、陛下と軍との間における裏の通路としてその価値が大である。当時殿下は、毎週木曜日だったと思うが、とにかく週に一回は陛下とゆっくりご対談遊ばされたので、その機会に恐らく軍中央部の事情は、殿下から陛下にお話し申し上げられたことと思われた。<sup>15)</sup>

近衛文麿（前総理大臣）——昭和一八年

陛下に奏上する政府の意見なり情報が必ずしも正確でないこと。悪い方面は極力秘して居ること。又顧問官から申し上げることに就いても一々政府で干渉し、前途に対する悲観的情報は一切申し上げることを許さない有様であるし、木戸内府は全く政府の欠点については知り乍ら申し上げないのだから、陛下には真相をお伝へすることが全く出来ない。そこで宮様方に就いては、御直宮様の御言葉のみを、陛下は御取り上げになり、他の宮様は御取り上げにならない。所で、秩父宮様は御不予定であり、三笠宮様はお若いし、唯、高松宮様のみが此処で唯一の希望である。そこで高松宮様に各方面の情勢を取調べて申し上げることは、今日真相を上聞に達する唯一の道となる。<sup>16)</sup>

時代も人物も異なるが、皇族は天皇への「裏の通路」という様な認識で三人は一致している。天皇と密接な関係にある皇族を介して天皇に情報を伝えることが、皇族と密接な関係を持つとした彼等の真意だったのである。ちなみに、真崎や沢田は参謀次長として上

奏の機会があつたはずである。その上なお皇族を擁立しようとした理由は、反対勢力の妨害を避けるために、「裏の通路」から天皇の「聖断」を引き出すことで、強引に政局を動かそうとしていたからだと考えるしかない。

それは、皇族擁立運動の活発化した時期が、天皇の意思表示が政治問題化された時期と一致することから推測できる。昭和四年の田中内閣総辞職は、天皇の不信任によるものと見做された。この時、天皇の聖断が政策決定の重要な一手段として浮上して来たのである。天皇の意思表示によって政局が劇的に動くことが現実にも明らかになったことから、天皇を動かし得る（と考えられた）皇族を擁立する意味が出てきたと考えられる。したがって、皇族擁立論は聖断待望論の一形態であるともいえよう。この様な意図に基づく皇族擁立論を《政略的皇族擁立論》とする。

また、皇族に政治関与を求めるのではなく、逆に皇族が政治的行動をしない不文律を有しているからこそ擁立するという考え方があった。皇族はその不文律を守っていたために、党派性がなく中立的な存在と見做され得た。しかも皇室の一員として国民統合の象徴的な役割をも有しているのである。東郷平八郎はこう主張する。

東郷平八郎（元帥海軍大将）——昭和六年

先年伏見宮殿下が内大臣府御用掛ニナラセラレタル例モアルカラ此ノ際閑院宮殿下ニ内大臣府ニおすわりヲ願ハバ其ノ御徳望ニヨリ軍部ハ必ズ静謐ニナルト思フ今ヤ側近ニハ徳望ノ人ガ大切ナノデ手腕トカ力量トカハ必要ハナイ<sup>17)</sup>

東郷としては、皇族には「手腕トカ力量トカ」を求めている訳ではなく、「おすわり」してもらっただけでその役割が十分にあったのである。つまり、皇族を象徴として戴こうという考え方である。これを《象徴的皇族擁立論》とする。皇族の軍司令官や終戦時の皇族内閣も、あるいは皇族を団体の総裁に戴くことも、皇族の有する中立性と国民統合の象徴性を活用しようとした事例と見ることが出来る。この様に、政略的皇族擁立論では皇族に政治関与を求める一方で、象徴的皇族擁立論ではただ「おすわり」を願うという、相反する二つの考え方が皇族擁立論には混在していたのである。

しかも厄介なことに、政略的皇族擁立論は象徴的皇族擁立論の名目で巧妙に隠されている場合があった。昭和六・七年の皇族総長擁立がまさにこれに該当する。昭和天皇は皇族総長について、「陸軍部内に派閥の争が非道くなつて誰も総長に出る者がなく、閑院宮に御立ちを願ふ外はない」。また「海軍も、ロンドン会議以来内部は乱れてゐた」からであると回想しているが、事の真相は政略的皇族擁立論に基づいた擁立運動であったことが田中宏巳氏によって明らかにされている。<sup>(18)</sup>この様に、皇族に象徴的な役割を期待するという名目で、実は皇族を介して天皇を動かそうという、立憲君主制の運用に重大な変更を迫る様な意図が含まれている場合もあったのである。従来は皇族は政治に無関係とされてきたが、これからは皇族を政治史の中で捉え直す試みが必要であらう。

次に、皇族の中でも高松宮に注目すべき理由である。全八巻にも及ぶ『高松宮日記』が刊行され、研究がし易いという事情もあるが、

重要視する理由は高松宮の地位にある。高松宮は大正天皇の第三皇子として生まれた。天皇の子供は「直宮」と呼ばれ、「一般皇族」とは明確に区別された。なぜならば、直宮は皇位継承順位で一般皇族の上に立つ存在であり、当然皇族としての序列（班位）も上位に立つからである。昭和天皇に代替わりした時は皇位継承順位第二位で、秩父宮に次ぐ存在であった。昭和八年に明仁親王が誕生して第三位になるが、昭和一五年に秩父宮が結核を患うと、健康な状態の成年皇族という点で皇族の筆頭の地位に立った。皇族の筆頭は天皇の状態に応じては摂政になる可能性もあるために、政治にも通暁していることが必要とされた格段に重い地位であった。昭和天皇の思召しもあり、海軍も高松宮の立場を重視して、昭和一六年一月に軍令部第一部第一課部員となった。さらに一八年八月から軍令部第一部直属部員を兼任し、一九年八月まで務めている。軍令部作戦室で勤務した野村実氏が高松宮について「第一部直属部員として戦争指導全般を担当され、また兼務の第一課部員としては作戦指導全般を担当されていた」と回想する様に、海軍の最も中枢の部局に配されたのである。高松宮は大東亜戦争中、戦局について最も詳しく知る位置にあり、また政局についても知悉すべき立場にいたのである。

また高松宮の成長期は、皇族擁立運動の次第に盛り上がってゆく時期と一致している。高松宮の成長過程を見るときで、同時に当時皇族が置かれていた立場の変化と、皇族としての自覚の変化の過程を見ることが可能である。本論文は、皇族（高松宮）が不文律を踏み越えてまで終戦工作に関与するに至った理由（行動原理）を、皇族

擁立運動の高まりと、そうした時局下で次第に重要性を増しつつあった高松宮の、皇族としての自覚過程を明らかにしていくことで論じたい。

## 二、青年期の高松宮

青年期の『高松宮日記』の特徴は、皇族という身分に対する特別配慮への不満と、そこから生じる焦燥を含む深い孤独感である。海軍兵学校時代の高松宮の姿を、同期生の佃定雄氏はこう証言している。

私たちは三年間で、もちろん回りには同輩がいっぱいいて、慰め合ったり 助け合ったり、泣いたり笑ったりもできましたが、宮様は全くの独りぼっちで、回りには誰一人、真のお友達というのはいなかったのです。

また、同期生の藤田正路氏が高松宮に「ご友人はつくらないのですか」と尋ねた所、「みんなに、えこひいきされている、と思われでは友人になった人に気の毒だから」<sup>(24)</sup>と答えたという。高松宮の性格は「生まれながらに備わった迪宮の威厳、奔放にふるまう淳宮」という二人の兄に囲まれて育ったせいにか、「万事控え目な『三男坊的な』性格」<sup>(25)</sup>であったという。この控え目な性格が、「友人になった人に気の毒だから」という気遣いを生み、皇族への特別配慮と相俟って、ますます孤独感を募らせていくことになったのであろう。

それでは皇族、しかも直宮という高い身分に対して払われた特別

配慮とはどのようなものであったのか、具体的に示したい。それは、海軍兵学校入校以前から既に始まっていたのである。

まず、高松宮が海軍兵学校に入校したこと自体が特別配慮によるものであった。皇族男子は原則として軍人になる義務があり、秩父宮は海軍、高松宮は陸軍を希望していた<sup>(26)</sup>。また両宮にはその意思の確認まで行われていたという<sup>(27)</sup>。しかし、高松宮の学習院初等科在学中には既に、将来の海軍行きが決められていたようである<sup>(28)</sup>。結局、秩父宮は陸軍、高松宮は海軍へと進むこととなった。尤もこれは、高松宮に対する特別配慮というより、当時の為政者による政治的な特別配慮ではあった。直宮ではない一般皇族は陸海軍のどちらかを選択することが出来たが、直宮はそれすらも許されなかったのである<sup>(29)</sup>。

また、秩父宮のために「皇族附陸軍武官官制」が、高松宮のために「皇族附海軍武官官制」が改正された。後者の例を取れば、それまで「海軍武官タル皇族」には「皇族の威儀整飾ヲ奉助シ軍務祭儀礼典及宴会等ニ随従スルヲ任」とした「皇族附海軍武官」(以後、「御付武官」と呼称)<sup>(30)</sup>が附属することになっていたが、大正五年の改正では「武官ニ非サル皇子ニハ特ニ皇族附海軍武官ヲ附属スルコトアルヘシ」とされ、しかも「武官ニ非サル皇子ニ附属スル皇族附武官ハ前項ノ外常侍奉仕スルモノトス」とされたのである<sup>(31)</sup>。つまり、高松宮には海軍武官として任官される以前から御付武官が附属され、しかも単に「威儀整飾ヲ奉助」し「随従」するのではなくて、「常侍奉仕」として身の回りの世話まで行うことと規定されたのである。また、従来御付武官は一名であったが、直宮に対しては二名が付け

られた。子爵田村不顯海軍中佐、岡田儋一海軍大尉の二名の御付武官が着任したのは、大正八年三月二十六日であった。

海軍兵学校予科に入学したのは、大正九年五月八日である。そもそも学制としての予科はなく、皇族だけの特別措置によるものであった。<sup>(34)</sup>生徒は高松宮のみなので、マンツーマン授業が行われた。「多数の生徒に交じっての授業なら要領よく居眠りもできようし、適当に息抜きもできる」が、それでもできず、また「教授も、お相手が直宮だから、より懸命にお教え」したという。そのため常に緊張を強いられ、「高松宮の気疲れは、しばらく続いた」様である。<sup>(35)</sup>しかも教室を出れば、御付武官が「学校内デハ何処ヘデモ尾ケテアルク」<sup>(36)</sup>制約された生活だった。ついに高松宮は御付武官に「涙ヲ出シテ見セ」て抗議をしたが、海軍兵学校長の命令によるので変えられないと聞くと、「今後ハアル程度マデ武官ニ対スル同情ヲシナイコトニスル」と決心している。この決心は相当強いものだった様で、以後の御付武官に対する態度には一貫して非常に厳しいものがある。「無能」「人ヲ馬鹿ニシテルネ」「全ク武官サント我輩トノ意志ノ交換ハ不可能ラシイ」「アハレムベキ点アルヲ覚ユ」といった記述が頻繁に日記に登場するのである。

それは『高松宮日記』が出版される際に問題視される程激しいものであったが、かといって御付武官に個人的欠陥があった訳でもない。例えば田村武官はその後、東伏見宮依仁親王の御付武官になっている。御付武官として失敗した人物が再び御付武官に任命されるであろうか。つまり、高松宮の怒りは、御付武官という制度そのものに対するものだったのであろう。高松宮は当時まだ一六才で

あった。何かと制約的な御付武官は、非常に煩わしい存在にしか見えなかったに違いない。友人をつくることを諦めた高松宮は、御付武官に怒りをぶつけてストレスを発散させるしかなかったのではなからうか。ちなみに、大杉栄の本を読むこともストレス発散の手段であったかもしれない。大正一〇年四月二日の日記には、「此頃以来空想ヲ楽シム。空想ニ吾ガ希望ヲ実現シ、吾ガ煩悶ヲ慰メ、吾ガ慾心ヲ満ス。誰カ空想ヲ以テ自ラヲナグサマル事ヲ知ラザルカ」<sup>(38)</sup>と書き留めている。大杉の「主義はちつとも知らうとしなかつた」が、「彼の隨筆的のものはずきでよんだ」という。ここからは、大正期の一般的な青年と変わらず、「自我の確立」という問題に悩む「煩悶青年」の姿が浮かんでくる。

### 三、皇族としての自覚の芽生え

この様に制約された孤独な生活を強いられていた高松宮は、「皇族馬鹿ゲタ職業ハナイ」<sup>(40)</sup>とすら考えるに至った。しかし同時に、皇族としての自らの立場を自覚し、受け入れ始めてもいた。大正三年一月一日、高松宮は牧野伸顯宮内大臣に次の様な依頼をしている。

大臣は多忙なるべきも、時々伺候して進言するよふとの難有御言葉あり。近來余程物事を御考慮遊ばすようにて、将来の爲め御頼母數き事なり。御言葉中御職務の許す折には美術其他社会問題等につき専門家に就き概要を聞きたしとの事あり。誠に結構の事なれば実験致す様仕るべしと申上げたり。<sup>(41)</sup>

皇族としての自分の立場を受け入れ始め、皇族としての素養を身に付けなければならないと自覚した表れである。そのきっかけは第三学年生徒だけの九州巡航乗艦実習（大正一三年五月三日〜一〇日）や内地実習航海（大正一三年七月二四日〜八月二六日）であつたと思われる。これまで皇族として賜謁する場はあつても、ほんのご機嫌伺い程度であつた。しかし実習航海では、「地元の県知事、市長らへの賜謁、ごあいさつ程度のお言葉をのべるにしても、その地方に関する予備知識が必要」であり、明確に役割の異なる「一少尉候補生と皇族の、二つの役割を果たしていかなねばならなかった」のである。皇族としての活動を実際に経験したことで、改めて皇族としての素養の必要性を痛感したのであらう。

牧野への依頼によって、講師陣には寛克彦<sup>(43)</sup>、紀平正美<sup>(44)</sup>、黒板勝美<sup>(45)</sup>、小柳司氣太<sup>(46)</sup>、佐佐木信綱<sup>(47)</sup>、瀧精一<sup>(48)</sup>、竹越與三郎<sup>(49)</sup>、三上参次<sup>(50)</sup>などの一流の学者が集められた。青年期に彼等一流の学者に就いて学問をしたことは、高松宮が「究理的性格」を身に付ける上で大いに役立ったのではないだらうか。それは、岡田啓介が「高松宮殿下は、ひとの意見をお聞きになるときは一応、その意見と反対の見方からかなりつっこんだ御質問をなさつて、よく事情を了解なさるといふ慎重<sup>(52)</sup>な方」と評する様な性格である。つまり、物事を根本から理解しようという性格である。その性格を物語るのが、昭和一六年八月一四日の平沼騏一郎暗殺未遂事件に関連した行動である。高松宮は事件の一報を受けて「テロ」行為最もニクむべし。何んとかこの青年のこうした行為を社会常識で否定する手段はないか。五、一五以来、

新しく意味づけられて傾向あるこの行為は、絶滅さるべきものであると考へた。そこで二〇日、三宅正太郎司法次官を呼んで事件の説明を求めている。しかし高松宮はこれに満足せず、事件の根底にある思想的な面から理解しようと試みているのである。九月二四日・一〇月一日には深作安文に水戸学とテロについて、さらに一〇月一八日・二〇日には国学院大学教授井野辺茂雄に水戸学と直接行動についての話を聞いている。こうした究理的性格は、皇族とは一体どのような存在なのかを根本的に考え直そうとする、思考形成の重要な原動力になつたと思われる。

ところで牧野への依頼に見える様に、皇族としての自覚は持ち始めたものの、皇族という立場への不満が消えた訳ではなかつた。青年期特有の葛藤もあり、高松宮にとつて暗中模索の時期であつたといえる。例えば次の文章である。

#### 退艦之辞

乗艦シテ艦長室へ案内サレテ艦長ノ云ハレタコトデ先ヅ予期ヲ裏切ラレタ。

配置ヲ云ハレテ第二ノ希望ヲ裏切ラレタ。

当直割ヲ見テ当直ノ少ク且ツ当直ニ立ツコトガ当然デナイ様ニサレテ落胆シタ。

チャーヂニ行カサヌ工夫ヲスルノニ落胆シタ。

航海長ガ室ニヤツテコラレテノ話ニ失望シタ。

見習ニ乗艦シタ様ナ扱ヒニ呆然トシタ。

副長ノ態度デアキラメタ。<sup>(55)</sup>

皇族への特別配慮によって、実務から遠ざけられていた不満である。またその逆に、「皇族と云ふ立場を担がれる」こともあった。但し昭和二年九月九日の「艦船乗組ニ対スル考察」<sup>(57)</sup>という短文の中では、皇族は「一般士官とは自ら異つた取扱ひを受けるのは又当り前である」と書いており、ある程度特別配慮に理解を示しつつあったことが窺われる。それでも、初級将校の頃から高待遇を受け続けることで、「高等なる待遇のみにたえられず、又、必要上、その待遇をうけざるべからず」<sup>(マ)</sup>場合にも、之をそらす様なことが往々出てきて、「そのこの区別を皇族自らつけられなくなつてしまふのではあるまいか」という危惧を抱いており、完全に受け入れた訳ではない。この様に艦隊勤務での特別配慮への不満や不安、そして葛藤に悩みつつも、「進むべき道をはつきりと認めて、元氣よく進んで行きたい」<sup>(58)</sup>と考え、皇族である自分を前向きに捉え直そうとした時期であった。

高松宮が皇族観をより深めるきっかけになったと思われるのが、昭和三年一月一二日の宗秩寮総裁仙石政敬への反発的主張であった。

八時に仙石総裁をよんで芝居見物の可否をたづねたら、芝居の役者が低級であり観劇場に入るものが低級であり、皇族が順々に見に行くとなるとまるで世間態が悪い。要するに世間の感情を心配するためにまだいけないと云ふことなり。それから皇族の行為について、世間の批判をうけた様なことは之を回覧にしうといつてやつた。<sup>(59)</sup>

これは難癖に近いと見えなくもない。さらに長期の遠洋航海を経て約一年後、昭和四年二月一日にも宮内大臣一本喜徳郎に「皇族の世間の噂、批難を知らせる様にいくら云つても宮内省はしないで、皇族がどうのこうのと云ふ。それはいけないと繰り返して」主張し、回答を求めている。紀平正美と「皇族が国民トノ媒介デアルト云フ様ナコトニツキ問答」<sup>(61)</sup>したのは、その五日後である。皇族とはどういう存在なのか、どうあるべきなのかについて、この時期非常に関心を持っていたことが分かる。高松宮の粘り強い態度に、宮内省もさすがに無視できなくなったのであろう。仙石総裁は六月七日、「年頭に宮内省に尋ねた皇族の生活等に関する宮内省の見解の答案」<sup>(62)</sup>を持参している。高松宮の主張はようやく実現したが、九月二五日に「今日も外出せず。まとまつても読書せず。どうも淋しい不安を軽く感ず。友達のないのや皇族として社会的無価値な生活や」と書き残しているのを見ると、高松宮の疑問が完全に払拭された訳ではなかった様である。しかしその翌日「仙石総裁をよび、今春答申をもとめた皇族の使命とか、信仰問題とかにつき所見をの」<sup>(64)</sup>べているので、ここで皇族という問題に対して、完全に納得はしないながらも自分自身の一応の答えには辿り着いたといえよう。恐らくその時の「所見」と思われるのが、次の文章である。

どうも皇族が軍籍に身をおくことを絶対のものとされてゐることを不可解にしか思へない。第一皇族がなぜ必要なのか、どうも皇族はいらないものの様にしか思へない。もつとも日本が、



万世一系の天皇の統べ給う国であるために、その嗣継のために

皇太子が必要であり、そのまた予備の人がほしいことも否定出来ぬところであるが、併し、それは無数無限の予備を意味しない。その数を学理的に計算した人はまだないであらう。まあ一人乃至二人と考へる。して見ると、私が皇族の地位におらねばな<sup>(7)</sup>ぬ理由にしかならない。私が皇族として無価値だ<sup>(8)</sup>と云へない。けれども、単にスペアーとして生きておるのが皇族であるとも云へないと思ふ。生きてゐて、そして悪いことせぬことがスペアーとしての全生命であり、全任務であるから、それで皇族の価値は存在する理由になるかも知れないけれども、又一方充分なる徳を具へ、そして智識をもつことが、予備者として必須条件であらねばならない。そうすると、皇族は単に内部的のもので能動的のものでないといふ得る。又、或意味で、私もそれを肯定するものである。併し現在、周囲の事情は、皇族の修学に対して考へられてゐない。少くとも、その便宜が与へられてゐない。<sup>(65)</sup>

この時点で、皇族の第一の役割は、万世一系の皇統の継嗣のためであり、その資格を保持するには十分な徳と智識を備えておくことが必要であると自覚するに至った。そして、「皇族は単に内部的のもので能動的のものでない」。つまり、皇族は不文律を守って行動は慎むべきだと考えたのである。この様に昭和四年で高松宮は皇族としての自覚を得たが、後に終戦工作を試みる様な、皇族の不文律を踏み越える様な行動原理は未だここでは見出すことは出来ないの

である。

#### 四、政治的素養の涵養

皇族と政治の関係を考察する前に、皇族が政治の素養をどの様に身に付けていったのかを検討しなければなるまい。それに関して注目できる事実は、近衛文麿・木戸幸一・原田熊雄・岡部長景・高木喜寛・酒井忠正ら、いわゆる宮中グループに分類される人物が皇族と接点を保ち、時には時局について話し合う機会を持つと図っていたことである。その動きは『木戸日記』によってある程度確認が可能である。

『木戸日記』を見る限り、彼らが特に注目していたのは秩父宮・閑院宮(載仁親王)・東久邇宮(稔彦王)であった。閑院宮は皇族の長老世代の代表であり、これまでも「皇族の首席として御相談」を受けていた人物であった。また東久邇宮であるが、東久邇宮の在京時には頻繁に、時局について語り合う機会を設けている。木戸は東久邇宮を「殿下の皇族としての御立場に関する御考へは誠に健全」<sup>(67)</sup>であると評価しており、閑院宮の次世代の中心的人物と見做していたといえよう。そして秩父宮であるが、昭和八年(二月二三日)の明仁親王誕生までは、皇位継承順位第一位である。事情によっては次の天皇になる可能性もあったのである。しかし秩父宮は「兎角青年将校間の気分を多分に御懷抱」<sup>(68)</sup>しており、時に天皇と激論を交わすこともあった。

当時(註、「昭和六年の末より同七年の春期に亘る頃」)は満

州事変勃発に伴ひ、国内の空氣自然殺氣を帯び、十月事件の發生を見る等特に青年將校の意氣熱調を呈し來れる折柄、或日、秩父宮殿下参内、

陛下に御対談遊ばされ、切りに

陛下の御親政の必要を説かれ、要すれば憲法の停止も亦止むを得ずと激せられ、

陛下との間に相当激論あらせられし趣なるが、其後にて

陛下は、侍従長に、祖宗の威徳を傷つくるが如きことは自分の到底同意し得ざる處、親政と云ふも自分は憲法の命する處に抛り、現に大綱を把持して大政を総攬せり。之れ以上何を為すべき。又憲法の停止の如きは明治大帝の創制せられたる處のものを破壊するものにして、断じて不可なりと信ずと漏らされたりと。誠に恐懼の次第なり。<sup>(69)</sup>

昭和七年六月二日に宮内大臣官邸で一本喜徳郎・木戸・近衛・原田が「秩父宮の最近の時局に対する御考が稍々もすれば軍國的になれる点等につき意見を交換<sup>(70)</sup>」しているのは、この激論を受けての対応と思われる。将来天皇になるかもしれない「御直宮方の思想問題<sup>(71)</sup>」は、宮中グループにとって非常に憂慮される問題であり、特に秩父宮に政治教育をしておく必要があった。それは秩父宮邸へ伺候して行われることもあったが、より自然な形で教育するため、前記のメンバー一同を住友別邸に集めて晚餐会形式で行われることが多かった。その結果、「御着眼広範に及ぶ傾向」が見られる様になったという。

高松宮も外遊から帰朝後の昭和六年七月一日・二月三日に、秩父宮と共に住友別邸に招かれている。しかしその次の機会は、昭和九年十二月二日まで確認することが出来ない。原田熊雄の『西園寺公と政局』に昭和一〇年五月一〇日まで高松宮関連の記事がないことも併せ考えれば、あくまで政治教育の重点は秩父宮であり、高松宮は秩父宮の陪席という立場であったことが分かる。しかし例え陪席であっても、宮中グループとこうした政治向きの話をする機会があったことは注目し価値する事実である。

また、高松宮自身も次第に政治問題に関心を寄せるようになっていた。昭和初期頃の日記には大きな空白期間があるため研究上難しい時期であるが、昭和八年には『中央公論』『日本及日本人』『キング』<sup>(72)</sup>『改造』<sup>(73)</sup>などを読んでいたことが確認でき、また学習院問題・思想問題・政治問題<sup>(74)</sup>についての所感を日記中に書き記す様になっている。

そして、外国関係団体の総裁職を引き受けたことも、高松宮の政治的素養を高める上で役立ったかと思われる。「海軍のみに没頭する時でなく、已に修業時代より、一步すすむべき時と考へ、外国関係として日土(註、日土協会)。止むを得ず美協(註、日本美術協会)<sup>(75)</sup>」の総裁を引き受けたのがきっかけで、日丁協会総裁(六年九月)・日伯中央協会総裁(七年十二月)、国際文化振興会総裁(九年五月)、帝国發明協会総裁(一一年一月)の総裁を次々と引き受けている。

因果関係としてはっきり証明はし難いが、この様な試みを通して高松宮は軍人でありながら政治的・国際的な視点を身に付けること

が出来たといえるだろう。第二次ロンドン海軍軍縮会議への態度がその好例で、高松宮は「一体、海軍の軍人の中に、本当に軍縮問題なんかについて判つてゐる連中が幾人あるか。：（中略）：寧ろこの際、政府がこれ以上国防費には使へないと言つて、額を決めて陸海軍に与へたらいゝじゃないか」と日記中に記している。また、パリティーを求めて問題となつた共通保有量に関しては、「共通保有量を極めよと云つて、それは論理的には当然のことであるが、それを定めてどうなるのか。成るほど、米國なり英國なりが、軍縮して日本の現在程度か、もつと以下にするなら軍縮にはならう、併し之は英國のやうな今なほ世界に殖民地をもつと考へてゐる國に出来る相談ではあるまい」と、國際的な観点から不可能であることを論じているのである。軍事は内政とのバランスにおいて存在し、外國との協調がなければ國が成り立たないという意見である。軍人でありながら軍事的視点に捉われず、政治的視点・國際的視点を重視する態度は、軍令部作戦課の要衝にいながら終戦工作を着想し得たことも無關係ではあるまい。

## 五、皇族としての自覺の確立と行動

昭和四年頃には、高松宮が皇族の存在意義について自分なりの答えを導き出したことは、既に紹介した通りである。それは、「生きてゐて、そして悪いことせぬことがスペアーとしての全生命であり、全任務であるから、それで皇族の価値は存在する」という、皇族の不文律を再確認するものであった。しかし一方で、「単にスペアーとして生きておるのが皇族であるとも云へない」とも考え始めてい

たことが注目される。皇族は皇位継承の予備者であるから、そのためには「充分なる徳を具へ、そして智識をもつこと」が、「必須条件であらねばならない」と自覚したのである。以後この「皇族の修学」が、高松宮にとつて最大の問題関心となつていった。「国学とか学者の方との連絡」を求めたのはそのためだと思われる。

その学者の中でも高松宮に最も影響を与えたと推察されるのは、「神ながらの道」の名で古神道を説いた東京帝國大学教授寛克彦である。寛とは「帝大それも東京帝大は教学の中心である、こゝに皇学神ながらの教を講座として（学部となれば猶よし）おくことが最もよし」であるとか、「皇族がこの信仰の問題、精神的の問題について會議をすることが急務なり。そしてそれを助けるものとして神祇官が必要になる」といった話をしており、寛が教学刷新委員会に提出する神祇府新設案について相談に乗っている。また、秩父宮の代理として出席することになった紀元二千六百年記念式典で、万歳を「弥栄」と唱えようと提案した所にも、寛の影響を窺い知ることが出来る。

この他に注目すべき史料として「皇子御教育の関心点」という文章がある。その内容は、「今日の皇族が自覺のないことのみをする」のは、「皇族たるものが、神道に対する理解、むしろ信仰は動作行為の根底にならなくてはならぬ」という「その根本を忘れてゐる」からである、というものである。これまでの皇族は「唯物的学校教育ノみをうけた、精神的にはやはり科学的な修身と云ふよりも単なる形式的な道德教育のみをうけた」だけであつたが、皇族として「理屈ではない自然の道」すなわち「神ながらの道は生れてから

教へらるべき」であると主張している。神ながらの道を皇族教育（皇族の修学）の根本に据えることを提言しているのである。それは同時に、「従来の軍人オンリー、さばりない様にの指導方針」に問題があるという指摘でもあった。皇族は「供奉とか御召とか云ふことは何にをさておき第一で、その次ぎは軍務として仰付けられてゐる」のであり、皇族としてどう行動するかが最も重要である、ここで自覚するに至ったのである。

ちなみに高松宮が神ながらの道に興味を持ったのは、貞明皇后の影響とも考えられる。貞明皇后は寛の御進講を取り計らった牧野に對して「寛博士の進講は自分十年來の希望なりしも、特に同博士の進講を聞く事は何等かの差支えなきものにやと躊躇し来りたるも、大臣の計らひにて其事も叶ひ、為めに積年の疑問も解け裨益するところ実に多大なるものあり。外來の宗教杯に對する心得も依るところを得、一視同仁の氣持を以て之に望（臨）む事出来、其他自分の修養に供する事柄も少からず、爾來心の落附きも出来、殆んど予期以上の教訓を得たり」と感謝の意を述べ、また自らの歌と明治天皇より拝領した品を贈っている。思いもかけぬ厚い謝意に對して、牧野は「低頭感涙を催しつゝ御前を拜辭」するしかなかった。いかに貞明皇后が寛の思想に傾倒したか知れよう。

皇族の不文律を自覚して皇位の控えとしての「皇族の修学」を進めた高松宮は、皇族としての自覚をさらに強め、結果として「從來ノ何ニモスルナク、ソレデ事ナカレヲ望ム」という皇族の不文律をただ守るだけでなく、時には皇族として行動することが必要であると考えに至った。その最初の行動が、昭和二年に起きた第二次

上海事変での戦地視察の志願であった。

戦地視察を志願した動機は、海軍軍人としての「修養のため」である。「海軍の統帥に關して、私の希望も、私が海軍の統帥者として自覚を得てのちに、始めて信念づけられる」と考えての行動であった。二・二六事件をきっかけに「閑院宮はロボット化」していることが若い皇族間で問題視されており、閑院宮の二の舞にはならぬという決意があったに違いない。「政治家と異なる軍人がロボットでは軍司令官もつとまらぬは「関東軍」に見るべく、戦場を知らぬ軍人が無価値なるは、確信」すると書き記してもいる。将来海軍軍人として高位に就くことが予想される身にとって、戦地視察は単なる「ロボット」皇族とならないために必要な修養であると考えたのである。

また、この様に当初の動機は自分の「修養のため」であったが、それは同時に皇族としての使命を果たす行動であるという自覚もあった。皇族として国民の先頭に立つことは皇族としての義務であり、天皇もまた「赤子何万人を戦鬪の死地におかれる以上は、却つて兄弟たる私をある程度全じ危険におかけることにより、満足をお感じになるのであるまいかとすら」考えたのである。例えば、伏見宮博義王が戦傷を負ったとき「結構な出来事なり」「これで皇族も戦傷者の中に算へられる帖面ツラとなり、よろし」と日記に記している。ましてや皇族が戦死することは、皇族の使命を果たしたことになる、「自他トモ喜ブベキコト」であった。いわゆるノーブレス・オブリージュと呼ぶべき考えがここに見て取れる。

ところが天皇は戦地視察に難色を示したのである。九月四日、高

松宮は天皇に戦地視察の可否について伺いを立てたが、天皇は当日ははっきりした返答をせず、翌日手紙で返答している。そこでは「(一)陛下の御事故の時のこと、(二)公務でゆくこと、(三)戦闘小休みの時機あるべし、等の点、並、別当、所属長官と話して今一度伺へ」<sup>(99)</sup>とあり、要するに天皇は秩父宮が外遊中であることから、高松宮に万一の場合の摂政候補として控えていることを求めていることが分かる。特に「公務」という用語について、天皇と高松宮の意見対立が明確に表れた。天皇は「公務でなく行くと、私(註、高松宮)の負傷等が、長官の進退同ひになる」と考えていたが、高松宮は「私達(註、皇族)の「公務」が、一般の人の公務とマルで事務的にチガフ」と考えていたのである。<sup>(100)</sup>つまり、天皇は「政治的の御考へ、行政的の御思召」が主であり、高松宮は皇族の特殊性を問題にしていたのである。皇族としての自らの役割を自覚して、危険な場所にこそ皇族は赴くべきであると考えての行動であったが、天皇は政治の原則以上に皇族の特殊性が優先するとは考えなかった。高松宮は「どうもやはり皇族に関する認識が不十分」<sup>(101)</sup>と感じざるを得なかったのである。

その後九月一〇日に再び参内し最終的な天皇の意向を尋ねた所、「絶対に行くな」と云ふ思召でもないので話を進め<sup>(102)</sup>ている。ところが翌日、松平恒雄宮内大臣・白根松介宮内次官・木戸宗秩寮総裁が協議し、松平が天皇の意向を伺った結果、「陛下には直接一応御許の御言葉はありしも、余り御希望なき趣を拝承す。よって「木戸が」高松宮の御都合を伺ひ五時に御殿に伺候し、殿下に拝謁、右の事情を言上、御止め申上」<sup>(103)</sup>げたのである。高松宮は「中々御聴入れ

なく、一時間半に亙り」木戸と議論したが、元々の動機が自分の修養のためであったので、やむなく視察を取り止めている。

木戸の主張は「秩父宮のお飯り后まで待つて、ゆけ」というものであった。天皇と同様に、摂政候補として控えていてくれという主張である。これを聞いて高松宮は「ロボット」としての皇族は平常軍人の如く装ひて政治に関せず、軍人たらむとすれば、万一の場合の政治家として待機を余儀なくせしめられ、而も之に対する素養を与えられ」ないと不満を顕わにし、「徒らなる存在たる不満は、上海行差止めによりて愈々深」<sup>(104)</sup>くなったと嘆いている。この場合の「政治」とは文脈から「摂政」のことであろう。また、日記の最後には「陛下に御心配をかけぬと云ふために、私としては大きな、或る意味では陛下に対しても間接に大きな犠牲を与へるものとして、上海行を止めたのである」<sup>(105)</sup>と、皇族の特殊性を認識しない天皇に対し皮肉を込めて書き留めている。<sup>(106)</sup>この事例から、天皇と木戸らの宮中グループ、そして高松宮との間で「皇族に関する認識」にズレが生じていたことが分かる。高松宮は、国家の非常時には皇族の使命として皇族の不文律を踏み越えるべきだと考え始めていた一方、天皇と宮中グループはあくまでも「能動的のものでない」立憲政治下の皇族の姿を求めていたのである。後に見られる天皇と高松宮の意見の相違は、既にこの時から始まっていたのである。

以上から、昭和二年頃に皇族としての自覚が行動を伴うものへと大きく転換したと指摘出来よう。高松宮は皇族の本質を追求した結果、従来通り皇族の不文律をただ守るだけでは不十分であり、皇族としての、また軍人としての修養が必要であると自覚した。なぜ

ならば、皇族は万一の場合の皇位継承の予備者であり、摂政候補であり、皇族総長の候補であつたからである。その素養を持っていなければ「ロボット」になつてしまい、国家の非常時には国民の先頭に立つべき皇族の使命を全う出来ないと考えたのである。

但し昭和一二年段階では、「政治」という用語が出てきているものの、未だ皇族として政治に係わるべきだという発想にまでは至っていないと思われる。その傾向が現れてきたのは恐らく、昭和一九、五年以降のことであろう。閑院宮春仁王が二、三の先輩皇族に相談した結果、皇族として天皇に政治的・軍事的意見を述べることは「われわれの陛下に対する、誠意」<sup>(10)</sup> だとして意見具申を實行したのである。しかし天皇からはあまり歓迎されず、ある時海軍の政務に關して話して勅諭を蒙つてからは、意見具申を止めてしまったという。閑院宮の相談した皇族が誰であるか明らかではないが、皇族も政治に係わるべきという雰囲気は皇族間に広まりつつあつたことは確かであろう。

さて、昭和一五年に高松宮が事実上の皇族筆頭の立場に立ち、また戦局・政局に知悉する立場に立つたのは前記した通りである。皇族筆頭になったことで、皇族としての自覚と使命感をますます強くしたと想像される。また天皇も、皇族筆頭となつた高松宮は「東京の近くへゐる方がよい」と考えていた。摂政候補として控えていてもらうと共に、私的相談相手となることを求めたのであろう。<sup>(11)</sup> 天皇と高松宮でたびたび政治問題を話し合っている形跡があるが、開戦決定の御前会議前日に、長期戦の見込みが立たないので戦争をするべきでないと天皇に意見したのは、その最たる出来事である。<sup>(12)</sup> 天皇

は高松宮の言葉を聞いた翌日、嶋田繁太郎海軍大臣と永野修身軍令部総長を呼び問ひたしたが、両人は「何れも相当の確信を以て奉答」<sup>(13)</sup> したために、天皇は開戦を裁可したのである。天皇に影響は与え得た。しかし高松宮の望む非戦の聖断は得ることは出来なかつた。開戦後、ミッドウェー海戦に敗北した時、天皇に終戦を促す書簡を送つたことがあつたが、基本的には軍務に専念していた様に日記からは判断出来る。しかし一八年七月一日の近衛文麿との会見で、ついに皇族として行動すべき時が来たと決断したと考えられる。一八年七月三十一日の次の記事では、皇族として具体的にどう動くべきかを考え悩んだ文章である。

戦局ノ困難ハ増大スベク、國際情勢又有利ナラザルハ速ニ改善セラルベキ予想立タザル時、最悪ノ場合ヲ考ヘ其ノ処置ヲ案ズルハ極メテ必要ナルナリ。即チ私トシ直チニ迷フ問題ハヤハリ生カ死ノ分レ道ニ立ツコトナリ。一ツハ都ニアリテ陛下ノ側近ニアルコトニシテ、一ツハ戦場ニ赴キテ敵中ニ突撃スルコトナリ。何レモ國体変革ノ暴動ニ際シ皇位ヲ守ルタメナリ。敗戦ニヨル國民ノ怨ミガ天皇ニ直接向ケラル、トセバ、私が戦死スルコトニヨツテ感情的ニ慰撫スルト共ニ國民ヲ發憤再起ヲ誓ハシムルコトヲ得ベシ。之先キノ大戦ニ独國崩壊ニ当リ「カイゼル」ハスベカラク直チニ戦場ニ赴キテ決死セバ「ホーヘンツォレルン」ノ後嗣ヲ立テ得ントスル進言ノ意味ニ合セントスルナリ。然レドモ現在ノ人材ニ於テハ一抔ノ不安ヲ國內ノ死後ニ殘サバルヲ得ザルモノアリ。而シテ生キテ側近ニアリテ何ソノ重

責ヲ負フベキヤヲ思ヘバ、又自ラノ識量ノ足ラザルヲ憂フルコト切ナリ。茲ニ生、死ノ迷ニナヤムヲ如何トセバ死ヲ選ブノミカ。秩父宮ニシテ些カニテモ活動シ得ラル、トセバ、三年ノ命ヲ一年ニツメテモ国家ノ危急ニ応ゼラルベキハ明カナルモ、未ダ之ヲタノムベク体力ノ快復シ給ハザルヲ惜ム。三笠宮ハ余リニ幼稚ナリ。数年後ヲ委スルニ足ルベキモ、今直ニモノノ役ニ立ツトハ思ヘズ。軍人タラントシテ已ニ命ヲ保ツニ専念シテ今日アリ。政治家タラントシテ未ダ機運ノ熟セザルモノアリ。モトヨリ政治ニ関与スルニハ東久邇宮ヲ先ツオサントスルモ、他ノ皇族ニシテ頼ムニ足ルモノナキ觀アリ。竹田宮ハ一臂ノ力トナルベシ。北白川宮ハ已ニナシ。世間、皇族ノ出デ、時局ノ一環ヲ担フベキ機ハ来レリト云フ。皇族出ツトアラバ国民ハ自ラ安ジテ進ムベキ道ニツカント。我國ノ特徴又存スト云フモ徒ラニ甘ク考フルハ不可ナルベシ。天皇親政アルベシト云フ。親政トハ如何。天皇一人ニテ何ニヲナシ給フヤ。総理大臣ト天皇トノ間ニ隔タルモノアリトノ不安モ、結局ハ国民ノ生活苦乃至戰爭遂行ノ不安ニ依ルベシ。皇族出タリトモ親政ヲ疑フ心裡ヲ解決スルトハ限ラザルベシ。要ハ総理大臣ヲ信頼スベク國民ヲ指導スルニアルベシ。皇族ノ出ズル意味モ亦之を覘フニ外ナラザルベシ。皇族自ラ総理大臣タルニ於テモ全理ナリ。要ハ官吏ノ奮発反省ヲ得テ一億一心ノ團結信頼ニヨリ國運ヲ啓カントスルニアリ。如何ニモシテ敗勢ヲ挽回シ勝算ヲ得ントノ努力ニ邁進セントスルニアルベシ。斯クテハ敗戦ニモ國民ノ決心動揺スルコトナク、復仇再興ノ念ヲ堅メメントスルヲ得ベシト云フモ、

猶直ニ發動シテ敗勢ヲ転ジテ必勝ヲ念ニ不動心ヲ確固ニセント云フナルベシ。少シデモヨケレバ皇族立ツベキニ疑ヒナキモ、輕率ニシテ却ツテ親政ノ実ヲ乱シ、思想戦ニオクレヲ取ルガ如キハ慎ムベキナリ。何ントナレバ皇族ノ立ツハ主トシテ精神作興ニシテ、之ヲ以テ國民ノ物質生活ヲ惠マントスルニ非ザレバナリ。<sup>(15)</sup>

既に軍備・補給の面で限界が見え始めており、一八年二月にガダルカナル島を撤退して以降は、ソロモン方面の戦況は悪化の一途を辿っていた。反撃しようにも航空機の消耗が激しいために難しく、また一方でイタリアではシチリア島上陸作戦が行われているなど、戦局も国際情勢も共に思わしくない状況に向かっていた。この様な危機的な状況にある時、近衛の共產化を憂慮する主張を聞いて「国体変革ノ暴動ニ際シ皇位ヲ守ルタメ」に皇族として動くべき時が来たと考えたのである。高松宮は「自ラノ識量ノ足ラザル」ことを切実に憂いており、「生、死ノ迷ニナヤムヲ如何トセバ死ヲ選ブノミカ」と考えたが、「現在ノ人材ニ於テハ一抹ノ不安ヲ国内ノ死後ニ残サルヲ得ザル」という思いもあり、今後の行動にまだ若干の迷いを抱えていたことが分かる。しかし、皇族の政治における役割を冷静に分析する程に、自分が「政治ニ関与」せざるを得ないという思いを強めていったと思われる。

閑院宮春仁王は昭和一七年頃、非常時に際して「皇族は国家の重鎮であり、陛下に対して最も近い御相談相手たるべきであります。陛下に対し奉つては、元帥、枢密顧問官、内大臣、宮内大臣を超越

して、最高、最近の地位に居り、国民に対しては内閣の上位に坐して、實際上、指導的役割をも、実力をも持つべきであります」と考えていた。<sup>(10)</sup>しかし高松宮は皇族の政治力を過大評価せず、「皇族ノ立ツハ主トシテ精神作興ニシテ、之ヲ以テ国民ノ物質生活ヲ恵マンストルニ非」ずと自覚していた。軽率に政治の表舞台に立つことなく皇族として「陛下ノ側近」としての務めを果たすために残された道を考えれば、近衛の期待する様に天皇に政治・軍事の実情を伝え、「聖断」を期待することしか残されていなかったであろう。そしてその役目には、近衛も指摘する様に、天皇の弟宮である高松宮自身が最も適当であると考え至ったはずである。こうして高松宮は政治の場に踏み込んでいくのである。一月八日、情報収集を活発化させるために細川護貞を個人秘書としたのは、その決意とも見ることに出来る。<sup>(11)</sup>

高松宮が最も活発に終戦工作に携わったのは、一九九年六月のマリアナ沖海戦に敗れ、サイパン島の保持が危うくなった頃である。前の引用では「三笠宮ハ余リニ幼稚ナリ」とあるが、一九九年五月一日に「一八三〇木戸、松平両大臣会食。三笠宮モ初メテコウシタ話ニ呼ンデ見ル(時局下、私が死ンデモオ上ヲオタスケ(ス)ル素質ヲツケル要アリト思ヒ、ドウモ平時ナラ政治的ニナルベク立入ラヌ様ニシタイ処ダガ、ソナナ事云ツテオレヌ)」と態度を変えざるを得なかった所に、高松宮の切迫感が表れている。高松宮にとって絶対国防圏の一角であったサイパンを失うことは「戦争ノ致命傷トナル」事態であり、戦局の打開を図るためには絶対に守らねばならなかった。そのため、マリアナ沖海戦で制海権・制空権を失ってもな

おサイパン奪回作戦を行う必要があったのである。高松宮は頻りに天皇にサイパン奪回作戦を進言し、天皇もまたサイパンは天王山であるという認識を持っていたが、<sup>(12)</sup>ここでも天皇は聖断を下さずに高松宮の期待を裏切ることになった。元帥府の要求どおり天皇はサイパン奪回作戦の断念を裁可すると、高松宮は戦局を絶望して日記に「戦況記録ヲ止メル」<sup>(13)</sup>と特筆大書している。高松宮にとって戦局打開の機会は完全に失われたと見られたのである。七月七日、サイパンが陥落した翌日、木戸内大臣・松平宮内大臣・百武三郎侍従長と会見してこう嘆息するしかなかった。

陛下ノ御性質上、組織ガ動イテキルトキハ邪ナコトガオ嫌ヒナレバ筋ヲ通スト云フ潔癖ハ長所デイラツシヤルガ、組織ガソノ本当ノ作用ヲシナクナツタトキハ、ドウニモナラヌ短所トナツテシマフ。今後ノ難局ニハ最モソノ短所ガ大キク害ヲナスト心配サレノド、サウシタトキノ御心構ヘナリ御処置ニツキ今カラオ考ヘテ正シ準備ヲスル要アリ。即チ精神上ノ師トナル人ヲオツケスルコトガ必要デアルトノ話ヲシタ。オ上ハ筋ヲ踏ミ外スコトガ全クオキラヒナタメ、内大臣ハ政治向キ、武官長ハ軍事、宮内大臣ハ宮中関係、侍従長ニハ側近ノコト(ト)云フ風ニ全クソレカラ少シデモ出タコトヲ申シ上ゲレバ御気色悪ク、自ラモ決シテ仰セニナラヌ。侍従長モ初メハ何事ニモツイテ申シ上ゲルツモリダツタガ、之ハ出来ナクナツタ。勿論、二・二六等ノ例ニヨリ侍従長ト内大臣トウタレタト云フコトハ、大キナ衝動トシテ益々ソノ区別ヲ立テルコトニヨリ、カ、ルコトナ



キ様トノ御氣持ヲヨクシテシマツタ。内大臣ハ全ク有難イ御氣持トハ思フガ余リニ極端デアルトハ感ジアリ。先日、伏見宮ガ海軍大臣ヲ換ヘル件ニツキ申上ゲラレタキモ、内閣ノ更迭ハコマル<sup>(ママ)</sup>。御思召ニヨルトナツテハコマル<sup>(ママ)</sup>ト内大臣ニモ仰セラレタガ、内大臣ノ発意ニヨルトシテモイケンイ<sup>(ママ)</sup>トハ、アトデモ内大臣ニ仰セナカツタガ、伏見宮ニ御話アリシコトナリ。随ツテ御修養ノ師タルベキ者ガ得ラレテモ、自然ソレガ具體的ノ政治問題ニフレタラ却ツテ御不興ヲ以テ一度デ御近ツケニナラナクナルデアラウトハ皆ノ考ヘナリ。サウシタ御考ヘ方ガ甚ダコマルノデ、ソレヲ改メナクテハナラス。内閣ノ組織更迭ニハ屢々御経験ハアルモ、ソレヲ各種ノ情況ノ下ニ分析的ニオ認メニナルコトナク、一ツノ結果ダケヲ経験トシテ前例ニサレル処ニモ政治性ナキ御性質ナリ。何ニシロ今日ノ如キ、憲法々々ト仰ツテモ、ソノ運用ガ大切ナル時ニ、今ノ様ナ有様デハ、例ヘ天皇トシテ上御一人デモ万世一系ノ一ツノツナガリトシテ、ソレデハ余リニ個人的スギルト思フ。

昭和九年頃に「皇族が個人として如斯こと（註、ロンドン海軍軍縮會議に関する意見）を奏上せらるるは御維新當時は或は有之しならんも、憲法發布後如斯ことはあるまじきことと思ふ<sup>(24)</sup>」と発言している様に、天皇はあくまで憲法に規定されたところの輔弼・輔翼のルートを守るべきであると考えていた。その決意は、二・二六事件などで側近が「君側の奸」視され謀殺されたことで、益々強くなつたという。しかしこの様に「筋ヲ踏ミ外スコトガ全クオキラヒ」な

性格は、高松宮にとつては「潔癖」に過ぎると映り、官僚的氣質の強かつた木戸<sup>(25)</sup>でさえも「余リニ極端デアル」と感じていた。その天皇の性格は平時では長所として生きているが、高松宮は「憲法々々ト仰ツテモ、ソノ運用ガ大切ナル時」に筋に固執し個人的意思を表明しないことは、むしろ逆説的に「ソレデハ余リニ個人的スギル」と考えていた。また、「例ヘ天皇トシテ上御一人デモ万世一系ノ一ツノツナガリトシテ」と主張している。つまり、高松宮は天皇の本質を發揮する行動を求めたのである。すなわちそれは、憲法が正常に運用されていない以上、聖断を下すべきだということである。その天皇の本質に立ち返つてもらうために、「精神上ノ師トナル人」が必要であると主張しているのである。

しかしその後八月二日に横須賀砲術学校教頭に転任して以降は、高松宮が「あまり話すことはないな<sup>(26)</sup>」と回想する様に、目立つた動きはない。天皇が意図的に、高松宮を遠ざけたからである。本来政治に關係したくなかつたにも係わらず、皇族としての使命感から天皇に政治の進言を行つてきたが、天皇は立憲的天皇に終始したために次第に疎遠になつてしまふという皮肉な結果であつた。二〇年五月には、こう嘆くしかない状況に陥つていた。

朝オキテ御殿場（註、秩父宮の療養先）ニ御無沙汰シテキル申訳ケヲ自問自答シ（テ）ミタラ泣ケテシマツタ。（オ兄様ガ御病中ニコンナ事態ニナツテシマツテ、御殿場へ出ヨウトソノ暇ハツクレヌコトハナイケレド、何ントオ話ヲシテヨイカ、何ニカ少シデモヨイ種ガアツタラト思ツテウトウ来レナカツタ。

私ハ政治ニハモトモトフレル趣味モナク、オ上ガソレヲオ喜ビ  
ニナラヌノヲヨイコトニシテキタラ、オ兄様ノ御病中ニ大戦争  
ニナリ、サテ政治ニモ口ヲ出スベキナノニ何シノ準備モナク  
ウトウ何ニモ出来ナク、オ上ニ申シ上ゲルコトモマヅイノカ御  
聴キニナル様ナ申シ上ゲ方モ出来ズ外国トノコトモ私ニハ何モ  
出来ズ………<sup>(127)</sup>

## 六、結論——皇族としての自覚と立憲制の枠の間で

大正天皇の第三皇子で直宮という特殊な身分に生れた高松宮は、  
その高い身分ゆえに不自由な生活を余儀なくされた。特に海軍にと  
っては建軍史上初めの直宮の入学であつたために、従来の一般皇族  
に対する以上に特別配慮が払われることになった。高松宮より年長  
の小松輝久氏（元、小松宮輝久王・海軍中将）と久邇朝融氏（元、  
久邇宮朝融王・海軍中将）は、大正の初めから七年頃までの間に

「兵学校などで、皇族の成績は発表せず席次も着けず別格に扱うよ  
うになつた」<sup>(128)</sup>と証言している。また大正五年、高松宮のために「皇  
族附海軍武官官制」が改正された。直宮の入学が近づくにつれて、  
皇族を形式的に扱う傾向が強まっていたと思われる。高松宮は「皇  
族トシテノ形式ヲ離レタ<sup>(129)</sup>附合ニノミ楽シミヲ感ズル」が、直宮の宿  
命として「現実ガ之ヲ許サ」なかつたのである。海軍兵学校在学中、  
特に御付武官の制約的な行動に対しては、強い不快感を抱いていた。  
加えて生来の控え目な性格によって友人をつくることをあきらめて  
しまつたことで、結果として孤独感をますます深めることになつた。  
皇族であるために制約された孤独な生活を強いられたことで「皇族

程馬鹿ゲタ職業ハナイ」とすら思いつめたが、年若い高松宮には無  
理もないことであつた。

高松宮が皇族としての立場を自覚し始めたのは、卒業前に行われ  
た二度の航海実習であつた。寄港する毎に地元の県知事や市長らへ  
の謁謁を経験したことで、お言葉一つ述べるにしても予備知識が必  
要であることを実感したと思われる。牧野宮内大臣に「美術其他社  
会問題」について専門家の御進講を受けたいと依頼したのは、同  
年の暮れである。この御進講によって高松宮は広い教養を得ると共  
に、岡田啓介が「高松宮殿下は、ひとの意見をお聞きになるときは  
一応、その意見と反対の見方からかなりつつこんだ御質問をなさつ  
て、よく事情を了解なさる慎重な方」と評する様な、究理的性格を  
身に付けることが出来たと思われる。この時得られた幅広い教養と  
究理的性格は、軍人であつたにも係わらず大局的観点から終戦工作  
を行う様になつたことと、無関係ではないであらう。

任官後も相変わらず特別配慮が続き、時に「失望」「落胆」する  
こともあつたが、皇族であることを自覚して、前向きに捉えようと  
模索していた。そんな時高松宮の皇族観を深めるきっかけとなつた  
のが、昭和三年から仙石宗秩稟総裁らと交わされた「皇族の行為に  
ついて」の問答であつた。皇族の存在意義について自問自答した結  
果、昭和四年には一つの所見に達することが出来た。それは「皇族  
は単に内部的のもので能動的のものでない」という見解であつた。

これは、政治には関与せず控え目に行動するということ、従来の皇族の  
不文律の再確認であつた。しかし同時に、皇位継承の予備者として  
「皇族の修学」が必要だとも考えていたことが注目される。この皇

族の修学を進めた結果、高松宮の皇族としての自覚はさらに深まっていたのである。

また昭和初期は皇族擁立の氣運が次第に高まりつつある時期で、場合によっては皇位を継ぐこともあり得る皇位継承順位第一位の秩父宮や、将来の皇族の主軸と囑望される東久邇宮の重要性が次第に増していた。そこで木戸幸一・原田熊雄・近衛文麿らの宮中グループにとっては、皇族が政治利用されない様に政治教育をしておくことが、ますますの重要な課題となっていたのである。特に秩父宮は革新派と關係が近く、「御親政」の必要性や「憲法の停止」などという発言をして天皇と激論を交わすこともあり非常に憂慮されていた。政治教育の方法として宮中グループは、晚餐会形式を利用している。御進講の様に構えてでなく、自然の会話の中で政治的素養を身に付けさせようとしたのである。高松宮に対しては、秩父宮・東久邇宮ほど頻繁にこうした政治教育は行われなかったが、高松宮自身も『中央公論』や『日本及日本人』などの総合雑誌を読み、外国關係の団体總裁職を進んで引き受けるなどして、政治的素養を身に付けていった。その結果、軍事的視点のみに捉われず広い政治的視点・國際的視点を重視する、当時のいわゆる条約派的な思考を身に付けている。二・二六事件の時、天皇が各皇族の中で「高松宮が一番御宜しい」<sup>(19)</sup>と言っているのも、この様なバランスの取れた政治觀を評価してのものであろう。

さて、昭和四年以降で高松宮の「皇族の修学」に最も影響を与えたのは、寛克彦の「神ながらの道」(古神道論)であろう。昭和一年の「皇子御教育の関心点」という文章では、従来の皇族は「軍

人オシリイ、さはりない様にの指導方針」で教育されたために、皇族としての自覚を失ったが、皇族こそ神道に対する理解(むしろ信仰)が必要であり、自覚ある皇族を育てるには神ながらの道が教えられなければならないと主張している。また、皇族は軍務以上に皇族としての行動が重要であるという意識が明確化したのもこの時期である。皇位継承の控えとしての素養ということでは始めた皇族の修学であったが、それを進めた結果、時には皇族の使命として従来の不文律を踏み越えることが重要だと考えるに至ったのである。

その具体的行動が、第二次上海事変での戦地視察の志願であった。高松宮は戦地に行くことは皇族の使命と考えたが、天皇は皇族としての行動を認めず、政治的・行政的考慮によって取り止めさせている。つまり昭和十二年頃には、皇族の不文律を踏み越える考えがはっきり出て来たと共に、皇族の特殊性を認めない天皇との意見の相違もまた現れてきたといえる。またこの段階では、皇族の政治関与まで肯定している訳ではなく、終戦工作の行動原理は未だ見ることが出来ない。昭和一二年の例では、皇族は非常の際には戦地に赴くべきとは考えていても、「政治」という言葉には「摂政」という以上の意味はなかった。皇族として政治に関与するべきであると考え始めたのは、閑院宮春仁王が天皇に政治的・軍事的意見の具申を試みた昭和一四、五年以降のことであろう。その頃に終戦工作の行動原理が現れ始めたといえることが出来る。しかしその様な皇族の考えは、立憲君主たろうとする天皇の受け入れる所ではなかった。

開戦決定直前に高松宮が行った避戦の意見具申がその象徴である。「いや、その場では何もおっしゃらない。だけれども、ぼくのいう

ことは、お考えになったね<sup>(11)</sup>と高松宮が回想する様に、意見具申が天皇に影響を与えたことは確かである。しかし天皇の「聖断」を引き出すことは出来なかった。天皇は高松宮が「潔癖」と呼ぶまでに立憲政治の「筋」を守ったのである。「高松宮は国家が存亡の岐路に立つ極限状態においては、陛下のいわれる立憲的行動から逸脱するのやむを得ぬではないか、と考え<sup>(12)</sup>て、その後も盛んに意見具申しているが、天皇はあくまでも立憲君主の行動から外れるべきではないと考えていたのである。天皇の意思表明に慎重で、昭和四年に「明治御時代とは時勢の変遷同日の論にあらず、先例等の有無を詮索する場合にあらず、愈々の時機に聖慮の顯はるゝ事あるも止むを得ざる事<sup>(13)</sup>」と考えていた牧野伸顯とは一線を画していた西園寺公望ですら、昭和九年には「陛下は最早幼冲の天子と云ふ訳にもあらず、今少し陛下の御意向の外部に顯はれても差支なからずや<sup>(14)</sup>」と発言していたことを考えれば、高松宮の主張がそう極端なものであるとはいえないだろう。

高松宮としては本来政治に係わりたくなかったにも係わらず、皇族の使命感から止むに止まれぬ気持ちで意見具申をしていたが、天皇を助ける為のこの行為によって、逆に天皇との疎隔がますます広がっていったのは皮肉なことであった。天皇の意志が立憲政治の遵守にある以上、皇族はあくまで不文律を守ることを求められたのであり、皇族による終戦工作は失敗に終わるしかなかったのである。

しかし実は天皇も「聖断」を下すべきか迷っており内大臣である木戸に相談していたが、木戸は「聖断」に非常に慎重な態度を取り続けたために、天皇はまた立憲君主として内大臣の進言を受け入れ

ざるを得なかった。ところが天皇がまさに思い悩んでいることを高松宮が堂々と直言し続けたことで、どうしようも出来ない天皇のフラストレーションが興じ、その結果高松宮と激論を交わす様になり、ついには高松宮を遠ざけるに至ったと考えられる。最終的には「聖断」に類らざるを得なかったことを考えれば、木戸がもう少し早く行動していたならば高松宮の終戦工作もあるいは成功したのかもしれない。ここに立憲制にその立場が規定されていない皇族の政治的限界が示されているのである。

## 注

(1) 宮中グループの定義は様々あるが、ここでは「宮中の官職に就いている人物、また彼らと密な連絡を取っている人物」としておきたい。なお、後藤致人氏は宮中グループの中に皇族も含めている『昭和天皇と近現代日本』吉川弘文館、二〇〇三年）が、それでは皇族の地位の特殊性を見落とすことになる。宮中グループは官職に基づくが、皇族は生来の身分に基いている。

(2) 吉橋政三「侍従武官としてみた終戦の年の記録」『軍事史学』第二号、一九六五年）九七頁。

(3) 皇族の行動が天皇に影響を与えたことは確かであった（鈴木多聞「東条内閣総辞職の経緯についての再検討——昭和天皇と重臣——」『日本歴史』第六八五号、二〇〇五年六月号所収、六九一―八四頁。しかし、それによって天皇が「聖断」に踏み切った訳ではないという点で、評価が難しい。

(4) 田中宏巳「昭和七年前後における東郷グループの活動（一）——小笠原長生日記を通して——」『防衛大学校紀要』人文・社会科学編、五一輯、一九八五年、同「昭和七年前後における東郷グループの活動（二）」『防衛大学校紀要』人文・社会科学編、五二輯、一九八六年、同「昭和七年

前後における東郷グループの活動(三)」「(防衛大学校紀要)人文科学分冊、五三輯、一九八六年)。

(5) 野村実『伏見宮と日本海軍』(文藝春秋、一九八八年)。同書は『山本五十六再考』(中央公論社、一九九六年)として改題刊行されている。

(6) 柴田紳一『昭和期の皇室と政治外交』(原書房、一九九五年)。

(7) 高久嶺之介『近代皇族の權威集團化過程——その一 近代宮家の編成過程』『社会科学』第二十七号、一九八一年二月所収。また、旧皇族の竹田恒泰氏は皇族の本質的役割を「第一に「皇統の担保」、第二に「天皇の藩屏」としているが、高久氏の見解と同様である(竹田恒泰「語られなかった皇族たちの真実」小学館、二〇〇六年、二六頁)。

(8) 天皇と皇族の關係で他に例をあげると、皇族が貴族院に形式的に議席を持っていたことも、天皇が文武の両權を統べていることに由来しているといえよう(松下芳男『皇族と日本軍制』再論——閑院純仁氏の批評に答える——『日本歴史』一七一号、一九六二年八月号所収、八三頁)。

(9) 木戸幸一『木戸幸一日記』下巻(東京大学出版会、一九六六年)昭和十六年一月一日条、九一六頁。

(10) 戦後の証言で史料批判が必要であるが、昭和天皇を立憲君主として教育し、重臣も立憲君主たる天皇の立場を守ろうとしたことを示す史料として、次をあげておく。

一、聖上(註、昭和天皇)ノ御教育ハ立憲君主トシテノ御教育ニ費サレタリ。

例ヘバ明治天皇ハ御親任ナリタル關係ノ言ヲ判然リト拒否被遊タルコトナキノミナラズ、当局外ノ者ノ言ハ一切御聴キニナリタルコトハナシ。

之ハ聖上モ全ク御同様デ政治当局外ノ者ノ政治的意見ヲ御聴キニナリタルコトハナシ。

之ハ牧野伯ガ御即位以來十五年間ノ奉職中モ亦、其後ノ拜謁ノ折ニモ体験セルコトナリ。

陛下ノスル御教育ニ重大ナル影響ヲ及セント思ハル、モノ、中ニ、三上參次博士ノ由來ニ関スル二度ニ亘ル御進講ガアリ、同博士ハ此ノ中デ一度御親任ニナリタル内閣ノ施策ニハ絶対ニ御從ヒ下サルベキコトヲ申上ゲ居レリ。

二、又、西園寺公及ビ牧野伯ノ御輔導モ専ラ此ノ線ニ沿ヒタルモノニシテ、両公伯ハ常ニ政治的責任ノ陛下ニ及ブガ如キナキ様努力セラレ全クスルコトハ政府ノ責任ニテ処理スル如ク勉メタリ。此ノ事ニ就テハ両公伯トモ、神經質トモ思ハル、迄ニ警戒セリ。(昭和二年一月三日)牧野伸顯伯談話要旨『木戸家文書(マイクロフィルム)』R55、国立国会図書館憲政資料室所蔵。

(11) 寺崎英成編著『昭和天皇独白録』(文芸春秋、一九九一年)一三六頁。

(12) 伊藤之雄『昭和天皇と立憲君主制——近代日本の政治慣行と天皇の決断——』(伊藤之雄・川田稔編『二〇世紀日本の天皇と君主制——国際比較の視点から 一八六七—一九四七——』吉川弘文館、二〇〇四年)一一〇頁。

(13) 『昭和五年七月二六日付上原勇作宛安田鍬之助書簡』上原勇作関係文書研究会編『上原勇作関係文書』(東京大学出版会、一九七六年)一一三—一六、五七五頁。

(14) 東久邇稔彦『東久邇日記』(徳間書店、一九六八年)昭和二年八月一日条、二二五頁。東久邇宮は当時、「明治維新後に於ける此重大時期に於て真に回天の偉業を全うし滿蒙問題の根本的解決をなすへき力は殿下以外には今や何人も所持」してないと見られていた(安田鍬之助宛石原莞爾書簡(一七六番)「安田鍬之助関係文書」学習院大学史料館所蔵)。

(15) 森松俊夫編『參謀次長沢田茂回想録』(芙蓉書房、一九八二年)四一頁。高松宮も軍令部で同僚の扇一登氏に「兄貴は、駄目ですよ。あれは、陸軍に成り切っていますから」(扇一登「扇一登オーラルヒストリー」政策研究大学院大学C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト、二〇〇三年、二二頁)と話しているように、秩父宮はいわゆる陸軍中堅層の発想

を有していた。また昭和三年七月下旬に、未だ陸軍中佐に過ぎなかった秩父宮の参謀総長案が検討された(額田坦『陸軍省人事局長の回想』芙蓉書房、一九七七年、七七頁)のも、秩父宮が陸軍寄りの思考を持っていたことを示しているだろう。

(16) 細川護貞『細川日記』(中央公論社、一九七八年)昭和十八年一月二日条、七七八頁。最初、近衛は東久邇宮に真相の上奏を依頼したが、朝香宮が上奏した結果失敗したので断られている(『真崎甚三郎日記』第六卷、山川出版社、一九八七年、昭和十八年七月十七日条、四一頁)。

(17) 『小笠原長生日記』昭和六年一〇月二十九日条。前掲、田中宏巳論文より転載。

(18) 寺崎英成編『昭和天皇独白録』七〇頁。

(19) 前掲、田中宏巳論文。但し、田中氏の論文は小笠原長生を過大評価している点に問題がある。別稿にて問題を指摘したい。

(20) 高久嶺之助氏は「直宮」・「宮家皇族」と区別しているが、直宮も宮家であり適当ではない。関院純仁氏(元・関院宮春仁王)の「皇孫殿下」・「一般皇族」という区別(関院純仁『私の自叙伝』人物往来社、一九六六年、六六―六七頁)や、秩父宮が三笠宮に対して「一般の皇族と自ら異なるもの」と自覚せしむるを要す(高松宮宣仁親王『高松宮日記』第二巻、中央公論社、一九九五年、昭和二年五月三日条、四三六頁)と発言していることを参考として、「直宮」・「一般皇族」とする。※以後、「高松宮日記」の出版年は特に記さない。

(21) 『高松宮日記』第三巻、昭和十六年一月二六日条、一八四―一八五頁。

(22) 野村実『高松宮殿下の思い出』(高松宮宣仁親王)伝記刊行委員会編『高松宮宣仁親王』朝日新聞社、一九九一年、三三五頁。

(23) 佃は、第一学年以来高松宮と一緒に散歩したり外出のお供をするような仲だった(『高松宮宣仁親王』二二四頁)。佃について、同じく同期生の末国正雄氏は「兵学校時代、殿下の本当の親友といえ、お日記にも出てきますが、同期の佃定雄だけではなかったでしょうか」と証言している

(末国正雄「高松宮殿下と海軍兵学校の生活」(『高松宮日記』第一巻付録)二頁)。

(24) 『高松宮宣仁親王』一七八頁。

(25) 『高松宮宣仁親王』六二頁。

(26) 『高松宮宣仁親王』一七八頁。

(27) 「皇族身位令」明治四三年三月三日皇室令第二号。

(28) 前田利男・鈴木孝・上山千代・永田千代・松平兼統・鷹司信輔・石川岩吉・渡辺八郎・三宅三郎「秩父宮様御幼少時代をお便ひしての座談会記録」(秩父宮記念会編『雍仁親王御事蹟資料』秩父宮記念会、一九六〇年)三三―三五頁。

(29) 『高松宮宣仁親王』一一五―一八頁。

(30) 『高松宮宣仁親王』一四六頁。

(31) 里見弾・東久邇稔彦・小松輝久・賀陽恒憲・久邇朝融「殿下といわれて幾星霜」(『中央公論』一九五七年三月号)二二七頁。竹田恒徳「私の肖像画―皇族からスポーツ大使へ―」(恒文社、一九八五年)三八頁。

(32) 「皇族附海軍武官官制」明治三〇年一〇月一四日勅令第三六一号。

(33) 「皇族附海軍武官官制改正」大正五年三月一五日勅令第一九号。

(34) 『高松宮宣仁親王』一四六頁。

(35) 『高松宮宣仁親王』一五八―一五九頁。

(36) 高松宮宣仁親王『高松宮日記』第一巻、中央公論社、大正一〇年五月二日条、五七―五八頁。

(37) 阿川弘之『高松宮と海軍』(中央公論社、一九九六年)一〇八頁。

(38) 『高松宮日記』第一巻、大正一〇年四月二日条、三七頁。

(39) 『高松宮日記』第一巻、昭和四年九月一六日条、四五〇頁。

(40) 『高松宮日記』第一巻、大正二年一〇月二日条、一九六頁。

(41) 伊藤隆・広瀬順昭編『牧野伸顕日記』(中央公論社、一九九〇年)大正三年二月一四日条、一七八頁。

(42) 『高松宮宣仁親王』二二二頁。

- (43) 法学者、東京帝国大学教授。
- (44) 哲学者、学習院教授。
- (45) 国史学者、東京帝国大学教授。
- (46) 漢学者。
- (47) 歌人、国文学者。
- (48) 美術史学者。
- (49) 臨時帝室編修局編修官長。
- (50) 国史学者、東京帝国大学教授。
- (51) 例えば大正一五年一月の時間割がある(『高松宮日記』第一卷、二三五頁)。
- (52) 岡田啓介『岡田啓介回顧録』(毎日新聞社、一九五〇年)二三三頁。
- (53) 『高松宮日記』第三卷、昭和一六年八月一四日条、二八〇頁。
- (54) 『高松宮日記』第一卷、昭和二年一〇月条、二八八頁。
- (55) 『高松宮日記』第一卷、昭和二年三月頃九、二五六頁。
- (56) 『高松宮日記』第一卷、大正一五年二月四日条、二二八頁。
- (57) 『高松宮日記』第一卷、昭和二年九月九日条、二七六頁。
- (58) 『高松宮日記』第一卷、昭和二年一〇月条、二九〇頁。
- (59) 『高松宮日記』第一卷、昭和三年一月一二日条、三〇三—三〇四頁。
- (60) 『高松宮日記』第一卷、昭和四年二月一四日条、三六七頁。
- (61) 『高松宮日記』第一卷、昭和四年二月一九日条、三七〇頁。
- (62) 『高松宮日記』第一卷、昭和四年六月七日条、四二六頁。
- (63) 『高松宮日記』第一卷、昭和四年九月二五五五五頁。
- (64) 『高松宮日記』第一卷、昭和四年九月二六日条、四五五頁。
- (65) 『高松宮日記』第一卷、昭和四年日記補遺欄、四七三—四七四頁。
- (66) 『牧野伸顕日記』大正一三年一二月一〇日条、一八〇頁。
- (67) 木戸幸一『木戸幸一日記』上巻(東京大学出版会、一九六六年)昭和八年三月二〇日条、二二七頁。
- (68) 『牧野伸顕日記』昭和八年三月七日条、五四八頁。
- (69) 本庄繁『本庄日記』(原書房、一九六七)一六三頁。
- (70) 『木戸日記』上巻、昭和七年六月二日条、一七六頁。
- (71) 『牧野伸顕日記』昭和八年三月七日条、五四八頁。
- (72) 『高松宮日記』第二卷、昭和八年一月一四日条、一五頁。同、昭和八年一月一八日条、一九頁。同、昭和八年二月九日条、三四頁。同、昭和八年四月一日条、六一頁。同、昭和八年九月九日条、五九五頁。
- (73) 例えば『高松宮日記』第二卷、昭和八年五月二日条、七九—八一頁。
- (74) 例えば『高松宮日記』第二卷、昭和八年九月二六日条、一四六—一四八頁。
- (75) 例えば『高松宮日記』第二卷、昭和八年六月一日条、八九—九一頁。
- (76) 『高松宮日記』第一卷、昭和四年二月一一日条、三六五頁。
- (77) 原田熊雄『西園寺公と政局』第四卷(岩波書店、一九五二年)昭和一〇年五月一日条、二五〇—二五一頁。
- (78) 『高松宮日記』第二卷、昭和二年一〇月八日条、三三八頁。
- (79) 『高松宮日記』第二卷、昭和二年一月一七日条、三三八頁。
- (80) 貞明皇后は神ながらの道についてこう解説している。「我日本人を通して此現世に輝けるところの光明の道は神隨の道なり、即神の存在をみとめ信仰を主旨として自己を大生命に帰一せしめ、世のあらゆる事実普き道理を包容し、真善美愛をして全からしめ、如何なる場合如何なる事にも有難く懐かしみ思ふ心即清明心晴々したる心の意気込みを以て世に処する所の道なり、然して他を排斥せず常に自他の融合を期しつつこの世界を救済せむとするまことたる弥来の道といふを得べし。」(寛克彦『大正の皇后宮御歌謹釈 貞明皇后と神ながらの御信仰』寛克彦博士著作刊行会、一九六一年、二二六頁)。
- (81) 『高松宮日記』第二卷、昭和一〇年二月一〇日条、三五四頁。
- (82) 『高松宮日記』第一卷、昭和一年二月二日条、三八六頁。なお、史料では「出案」(だつあん)となっているが、これは「出案」で正しいのではないか。
- (83) 『高松宮日記』第三卷、昭和十五年一〇月二九日条、一三二頁。寛は

著書の中で、「万歳」よりも純粹の日本言葉である「弥栄」の発声を推奨している(寛克彦『神ながらの道』(皇后宮藏御蔵版、内務省神社局発行、一九二六年)二八六―二八八頁)。

- (84) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年一月一七日条、三六八―三七〇頁。
- (85) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年一月八日条、三五九―三六〇頁。
- (86) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年一月一四日条、三四八―三四九頁。
- (87) 阿川弘之氏の指摘する皇后の訓育(阿川弘之『高松宮と海軍』二二―二三頁)とは、神ながらの道の思想ではないか。
- (88) その内容をまとめたのが前掲『神ながらの道』で、官国幣社・府県庁に下賜された。

- (89) 『牧野伸顕日記』大正四年七月一九日条、二二〇頁。
- (90) 貞明皇后と寛の關係については片野真佐子『皇后の近代』(二〇〇三年、講談社)を参照。

- (91) 『高松宮日記』第八巻、昭和二年七月二三日条、一一八頁。
- (92) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年九月二一日条、五八五頁。
- (93) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年九月二一日条、五八七頁。
- (94) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年八月一七日条、五四六頁。なお、秩父宮も「全くのロボットであった」と感じていた(秩父宮雅仁親王「陸軍の崩壊(昭和二十四年七月)」『中央公論』第二三四五号、一九九六年一月所収、六六頁)。また、閑院宮春仁王は宮内省の意向にも従順である

父・載仁親王との間で「深刻にして根本的な、誇大な表現をするならば思想的対立が生じ」ていたという(閑院純仁『私の自叙伝』六〇頁)。

- (95) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年九月二三日条、五八九―五九〇頁。
- (96) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年八月二八日条、五六六頁。
- (97) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年九月二六日条、六〇一頁。
- (98) 『高松宮日記』第六巻、昭和二年五月一八日条、二八五―二八六頁。
- (99) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年九月五日条、五七八頁。
- (100) 昭和二年三月から二〇月まで、秩父宮は英國王戴冠式に参列のため

渡欧していた。

- (101) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年九月四日条、五七八頁。
- (102) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年九月五日条、五七九頁。
- (103) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年九月二〇条、五八二頁。
- (104) 『木戸幸一日記』上巻、昭和二年九月二一日条、五八九頁。
- (105) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年九月二一日条、五八五―五八七頁。
- (106) 『高松宮日記』第二巻、昭和二年九月二一日条、五八八頁。
- (107) ちなみに、秩父宮の帰朝後の一〇月には上海方面への戦線視察が実現している。また一四年二月には中南支戦線、三月には北支戦線を視察している。

- (108) 閑院純仁『日本史上の秘録』(日本民主協会、一九六七年)一八六―一八九頁。なお閑院宮春仁王が皇族の自覚を深めたのは、陸大教官時代に国民精神文化研究所に行くと共に、寛克彦、平泉澄、河野省三、藤沢親雄、大串夷代夫、田中寛一、尾佐竹猛などを自宅に招き、妻と熱心に話を聞いたことが影響しているという(閑院純仁『私の自叙伝』二二三頁)。

- (109) 『高松宮日記』第三巻、昭和二年一月二六日条、一八四頁。
- (110) 日記からは、政治問題も話し合っていたことが分かる。例えば『高松宮日記』第三巻、昭和二年九月九日条、二九〇頁。

- (111) 開戦前の高松宮の行動は、『高松宮宣仁親王』(三三〇―三四六頁)が詳しい。

- (112) 『木戸幸一日記』下巻、昭和二年一月三〇日条、九二八頁。
- (113) 加瀬英明『高松宮かく語りき』(『芸芸春秋』一九七五年一月特別号)一九六頁。

- (114) 『高松宮日記』第六巻、昭和二年七月二五日条、四六六―四六八頁。これまで余り見られない異例の長文で会話が記録されている。その内容は後の「近衛上奏文」に近い、日本の赤化を危惧する内容であった。高松宮が近衛の論理を完全に肯定したかどうかはともかく、近衛の話は高松宮にとって相当のインパクトであったことは間違いないだろう。



(115) 『高松宮日記』第六卷、昭和一八年七月三二日条（日記帳卷末、五〇九—五一頁。

(116) 関院純仁『日本史上の秘録』一七二頁。

(117) 細川護貞『細川日記』（中央公論社、一九七八年）昭和一八年一月八日条、二二—二三頁。

(118) なお、竹田恒泰氏は昭和一九年二月一八日の「一、私ノ保身ノ時ニアラズ、戦死スルベキ時ナラズヤ」（『高松宮日記』第七卷、昭和一九年二月一八日条、二八六頁）を引用して高松宮はこの時「戦死するべき」と決意していたとする（竹田恒泰「語られなかった皇族たちの真実」一〇五—一〇六頁）。しかし、高松宮が死よりも政治関与に重点を置いていたと見るならばむしろその発言は、「二、海軍ノ最後の努力スベキ時ナリ。大臣、又ハ総長交代シテ活ヲ入レナホスベキデハナイカ」という主張に衝迫力を持たせるための政治的駆け引きの意味合いの方が強かったのではなからうか。

(119) 『高松宮日記』第七卷、昭和一九年五月一日条、四二二頁。

(120) 『高松宮日記』第八卷、昭和一九年六月三日条、五〇三頁。

(121) 中沢佑刊行会編『海軍中将中沢佑』（原書房、一九七九年）一四二頁。

(122) 『高松宮日記』第七卷、昭和一九年六月二四日条、五〇六頁。

(123) 『高松宮日記』第七卷、昭和一九年七月八日条、五一四—五一五頁。

なお升味準之輔氏は「側近が宮に訴えた憂慮を記したものと」しているが、その前後の高松宮の主張を見れば、高松宮の主張と判断してよいのではないか（升味準之輔『昭和天皇とその時代』山川出版社、一九九八年、一九〇頁）。

(124) 『木戸幸一日記』上巻、昭和九年七月二三日条、三四六頁。

(125) 木戸の性格について、例えば岸信介はこう証言している。「すべて几帳面な、どこにも隙のないきちんとした人でした。木戸さんはやっぱり政治家ではなく官僚ですね。だから陛下のおそばにいてもあんまり政治的な機略を用いるというようなやり方じゃなかった」（岸信介『岸信介の回

想』文芸春秋、一九八一年、一四頁）。

(126) 加瀬英明「高松宮かく語りき」二〇二頁。

(127) 『高松宮日記』第八卷、昭和二〇年五月一八日条、八五頁。

(128) 里見弴、東久邇稔彦、小松輝久、賀陽恒憲、久邇朝融「殿下といわれ  
て幾星霜」二一九頁。

(129) 『高松宮日記』第四卷、昭和一七年七月五日条、二九七頁。

(130) 『木戸幸一日記』上巻、昭和一九年二月二八日条、四六八頁。

(131) 加瀬英明「高松宮かく語りき」一九三頁。

(132) 加瀬俊一「高松宮の昭和史」『文芸春秋』一九八七年四月号、二二八頁。

(133) 『牧野伸顕日記』昭和四年六月二五日条、三七五頁。

(134) 『木戸幸一日記』上巻、昭和九年八月九日条、三五二頁。

※旧字で書かれている史料を、一部新字に置き換えた。